

明るい方へ

八塚一青

「いいかい、君、好きになるなら、一流の人物を好きになりなさい。—それから、これは、いかにも爺さんらしい台詞かもしれないが、本当にいいものはね、やはり太陽の方を向いているんだと思うよ」

本当にいいものは、太陽の方を向いている。北村薫さんの小説「山眠る」に出てくる一節が私の座右の銘です。

私は高校時代から詩を嗜好していました。ところが詩の世界というのは太陽ではなく月に向かって吠えることがマジョリティである特異な場所です。それは決して善し悪しではなく、あくまでただの好き嫌いではあったのですが、「明るい詩」を好む私からすれば居心地が悪い場所でした。

そして私は滑稽俳句に出会うわけですが、ここで誤解を恐れずに言わせていただきます。「滑稽俳句」というのは「頭痛が痛い」と同じく、重言ではないでしょうか。「俳」の文字を辞書で引きますと「おどけ。こっけい。」と出てきます。にも関わらず「滑稽俳句」とわざわざ謳わなければならない現実を、私は歯痒く思っています。

さて、せっかくですから（滑稽）俳句で私がいちばん大事にしている「俳味」も辞書で引いてみましょう。そこには「**俳諧のもっている情趣。軽妙・洒脱な味わい。**」と書かれています。名は体を表す。「俳句」とはそもそも「軽妙洒脱な味わい」を旨とする句（言葉・詩）であることは明白なのです。

和歌、連歌からの流れで生まれた俳諧。そして俳句。我らが滑稽俳句協会の掲げる「俳句の本質は滑稽である」は言わずもがなののですが、世間の方々、とりわけ外国の方々にはほぼ認知されていません。それは俳諧から生まれた血を分けた兄弟「川柳」の存在があるからです。幸か

不幸か滑稽な句は川柳が一手に引き受けますといった受け皿が日本にはあったため、我々は「滑稽俳句」と重言を甘んじて受け入れなければならないマイノリティになりかけています。それでもまだ国内はマシでしょう。滑稽俳句と川柳の繊細な二刀流を使い分ける手段があるからです。問題なのは世界一短い詩であるH A I K Uを愉しむ外国の人たちです。どれだけの方が俳味（俳諧フレーバー）を理解されているのか老婆心ながら心配です。

私が滑稽俳句に臨む際、まず最初に心掛けるのが「太陽の方、明るい方を向いているか」です。なぜなら、それが本当に良いものであると強く信じているからです。「明るい詩」には、一六〇キロ直球の力があり、その単純明快な分かり易さはとても心地の良いものです。信じるものは救われる。言葉と言葉を結ぶ時、私は金子みすゞの詩の冒頭部分を思います。

「明るい方へ」 金子みすゞ

明るい方へ

明るい方へ。

一つの葉でも

陽の洩るところへ。

一つの言葉でも、私は明るい方へ向かせてあげたい。